

## ビキニ事件から 60年を迎えて・・・！

明日、3月1日でアメリカがマーシャル群島ビキニ環礁で行った水爆実験により日本のマグロ漁船が放射性物質を含む死の灰を浴びたビキニ事件から60年を迎えます。

**「ヒバクシャ'14冬」は、広島、長崎に続く核惨事となったこの事件に遭遇した元乗組員の**大石又七さんの被爆被害根絶を求める魂の訴えから始まった！****

今年1月下旬、大石又七さん（80歳）は東京都内の学校で60年前の「死の灰」の記憶を語られました。「人の手に負えない核の恐怖は今も続いていることを知ってほしい。解決のすべを知らないまま、すすみ続けるほど恐ろしいことはありません」と穏やかな口調の中には気迫がありました。

14歳で漁師になり、20歳だった1954年1月、マグロはえ縄漁船の第五福竜丸で静岡県焼津漁港を出港し、3月1日事件に遭遇することに。乗組員23人が被爆しました。

「味も臭いもない、雪が降るようだった」との感想で、数日後、皮膚は水ぶくれ、髪はすっと抜け落ち、乗組員仲間と入院するも、無線長は半年後に急性放射線症で家族や仲間が見まもる前で壮絶な死を遂げました。家族や仲間の泣き声が広がる病室で怒りが込み上げたそうです。

退院後に待っていたのはいわれなき差別や偏見と、アメリカから支払われた見舞金190万円への理不尽な憤りだけだったそうです。「人混みに隠れて暮らそう」という思いから静岡から東京へ逃れると大田区で被爆の過去を遠ざけた生活を余儀なくされました。

そして、大石さんが沈黙を破ったのは30年前、200万ドル（当時で7億2000万円）の見舞金で責任を曖昧にして早期決着を図った日米両政府の対応でした。

アメリカは法律上の責任がないので補償はしないが、慰謝料として出した額です。

大石さんは、治ったと思って退院し亡くなった仲間の死、忘れ去られていく事件の教訓、止まらない核開発・・・耐えられず、悔しさに突き動かされ語り続けた講演は何と700回を超えたそうです。

「**ビキニは今につながっています。**」大石さんが繰り返し講演で訴えてきた言葉です。

「兵器として、原発として、核は進化しました。目には見えない放射能は必ず人間の体に跳ね返る。皆さんは知らなくてははいけません。」大石さんはアメリカの核実験で被爆した島民たちと共に、ビキニの教訓を世界に訴え続けています。

## 戦争そのものを無くさない限り 核の根絶はない！！

兵器利用であれ、民生利用であれ一旦核の被害に見舞われてしまうとその傷は癒えることは決してありません。

日本は、広島、長崎、ビキニ、そして福島と4回も核の惨事に遭いました。

しかしながら、政府はその教訓を活かすどころか、エネルギー基本計画案という原発拡大計画を推進し、さらには、特定秘密保護法制定、憲法の解釈変更し集団的自衛権の行使が可能なものにするなど、国家安全保証法『憲法改正手続きを経ることなしに憲法自体を破壊し、日本を軍事中心の国家にする（壊憲法）』の制定に向け加速しています。

核と人類は共存しない、核兵器が廃絶されても核に関する知識は残ります。そこで再び戦争が起きると誰かが核兵器を製造しかねません。従って、核兵器を廃絶する努力は戦争そのものを廃絶する努力と結びつかないと本当の意味で核の根絶にはなりません！